

イノベーションを起こせ —新たな価値を生む1—



しょうばらいろ むらさきのゆめシリーズ。蔵出し梅酒ケーキ、米粉入りビスケットも産学官連携から生まれた。

大学には研究する人がいます。そして、『研究技術・ノウハウ・アイデア・設備など』=『シーズ(種)』があり、これらの資源を地域活性化につなげる取り組みが進められています。

県大・市・市内の商工団体などで構成する「しょうばら産学官連携推進機構」が橋渡し役となり、地域や事業者が抱えている課題やニーズと、県大が持つ『シーズ』を結び付けることで、それまでにはなかった新たな商品が誕生しています。

しょうばらいろ むらさきのゆめシリーズは、庄原産有色米(古代米)を使用したクッキー、パンを商品化したもので、県大が持っていた、有色米を糖化液にする製造技術^①を利用して開発されました。

しょうばらいろ むらさきのゆめ シリーズ

米麦工房21めぐみ
(株式会社和泉光和堂)
TEL0824-75-4515

た。その名のとおり、商品はやさしい紫色(アントシアニンの一種)をしていて、ほんのりした甘さとポリフェノールの多さが特徴です。開発期間は約1年半。当初は食パンのみを生産していましたが、日持ちがしないこともあり販売数量は伸び悩みました。そこで日持ちのするクッキーを開発。長距離を輸送できるように、道の駅などで販売が可能になったことで、広く商品をPRでき、売り上げ増にもつながっています。

米麦工房21めぐみの荒井武

店長は「当社を代表する商品が誕生したという意味では、この事業に参加して良かった。庄原産の古代米を使った他には無い商品ができて喜びました」と話す一方で、「話題性もありましたが、これだけでは弱い。産学官連携の中で、新しい商品の開発も進めていきたい」と力を込めます。「庄原はまだまだ知られていませんので、こうした商品をしつかり売り込んでいくことが大切だと思っています。試食会なども積極的に行って、庄原をPRしていきたい」と思っています。

米麦工房21めぐみ
店長 荒井 武さん

お客様からは好評でよく売れています。お客様のニーズに合わせて、食べやすい量や価格設定にしたことで売り上げが伸びています。商品が売れることで庄原のアピールにもつながりますので、市外にもどんどん売り込んでいきたいと思っています。



古代米生産者
大掛秀秋さん(川北町)

産学官連携事業に関わることができてうれしい反面、もっとこうした取り組みが市内全体に広がればいいと思います。古代米が欲しいという業者は増えていきますので、生産者が増えれば、古代米をテーマにまちづくりするというのも面白いですし、庄原市の新たなPRにもつながるのではないのでしょうか。



特集

県大のチカラ

●県立広島大学

平成17年4月1日に「県立広島女子大学」「広島県立大学」「広島県立保健福祉大学」が統合して開設された公立大学。広島・三原・庄原にキャンパスがあり、4学部11学科と助産学専攻科、総合学術研究科を有している。庄原キャンパス(前身の広島県立大学は平成元年に開学)には生命環境学部(生命科学科・環境科学科)があり、大学院生を含め767人(平成26年5月1日現在)が在籍している。

庄原市は大学のあるまちです。本市にある県立広島大学庄原キャンパスは、前身の広島県立大学開学以来、県北唯一の4年制大学として、毎年多くの学生を受け入れ、さまざまな分野で活躍する人材を輩出しています。大学というところ、どこか近づきたいイメージがあるかもしれませんが、庄原市を見渡すと「県大」の存在を感じる場面がいくつもあります。学生たちの学びや研究活動の場はキャンパスから地域へと広がり、地域住民とのつながりも生まれています。今月は、知っているようで知らない「県大庄原キャンパス」をクローズアップします。 ※特集では、県立広島大学庄原キャンパス(統合前の広島県立大学を含む)を「県大」と呼称します。



地域課題を解決したいー。
新しいことに挑戦したいー。
県大はその思いに応えるチカラがあります。
関係する2人に話を聞きました。



●産学官連携商品集

県立広島大学が地域の企業、地方自治体などと連携協力により開発された26商品が掲載されている。
発行：県立広島大学地域連携センター

イノベーションを起こせ

—新たな価値を生む2—

当機構は、主に大学の研究者と地域や事業者との橋渡しをしています。
事業者や地域から直接相談をお受けすることもありますが、企業を訪問させていただいて、困っていることや新しく挑戦したいことを伺うこともあります。相談内容を大学側に伝え、こういった研究者が適しているかなど話し合いを持つなかで、課題に対する取り組みを進めます。そこから多くのものが商品化に結び付いています。
商品は開発して終わりではなく、周知や販売促進というところまでしっかり支援する体制をとっています。道の駅など市内には商品を置ける施設が多くあるので、特設コーナーの設置やポップ作製など店頭販売によるPRを行い、

消費者に試食してもらいアンケートをとるといった活動もしていきたいと考えています。
広島県内で大学と企業、そして自治体が構成員になっている当機構のような組織はほとんどありませんので、庄原市の特色だと言えます。
大学研究者の世代交代が進んでいるので、大学が持っているシーズが少しずつ変化してきています。当機構としてそのシーズをきちんと整理して、事業者や地域の皆さんに情報発信していくことが必要だと考えています。それが新しい連携を生み、新たな事業への展開につながればと思います。
経営上の課題や新事業への挑戦、地域課題の解決などにお困りの際は、当機構へ気軽にご相談ください。

新たな事業につながる役割を担います



しょうばら産学官連携推進機構
コーディネーター
伸 正人 さん



食彩館しょうばらゆめさくら内のミート工房では数量限定で精肉を販売。レストラン花ほほろでは、生ハムを使ったサラダが食べられる。7月からはスベアリーブを加えた定食を販売する予定。米麦工房21めぐみではカツドッグとして販売中。

庄原商工会議所 大歳 龍さん



どんぐりココロ豚は希少価値の高い商品です。生産量が少ないのは手間ひまがかかっているという面があり、そこに付加価値がつくという事例が全国にも多くあります。精肉を取り扱うには量が足りませんが、生ハムなどの加工肉にすることで長期保存が可能になり、取り扱いの幅も広がりますし、さらなる付加価値が付き収益の面でも期待できると思います。

どんぐりココロ豚生産者
百間不二夫さん(山内町)



生産者として、どんぐりココロ豚の評価はうれしく思っています。もっと生産者が増えれば良いですが、放牧するところが限られることもあり条件は厳しいです。一つの提案にはなりますが、豚舎の中でもどんぐりを与えれば、「どんぐり豚」として商品化できるようにして、加えて放牧したものを「どんぐりココロ豚」として売り出す方法はどうか。これを生ハム限定商品にして価値を高めてもいいと思います。そういった考えや取り組みが生産者増へのステップになると思います。

自然豊かな庄原市で採れた栄養豊富などんぐりを餌として与え、ストレスの少ない大自然の中で伸び伸びと育てた「どんぐりココロ豚」。どんぐりを与えることで、豚の脂肪中の不飽和脂肪酸の

どんぐり ココロ豚

庄原商工会議所
TEL0824-72-2121

比率が高くなり、おいしい豚肉になるのだといいます。
県大が行っていたこの研究に着目した庄原商工会議所は、ブランド化に向けて取り組みをスタート。市内の養豚農家や県大、市と連携して、肉質変化のデータ収集と検査・分析を行い、不飽和脂肪酸が増加することを実証し、メニュー開発に取り組みしました。
「試食会では、『肉にしつこさがなく、脂身がおいしい』『くせがなく、柔らかくておいしい』といった高い評価をいただいています」。こう語る

のは同会議所の栗部秀道事務局長。庄原独自のブランドとして観光振興につながるという手応えを感じています。
ただ、そのためには安定した生産体制の確立が必要です。餌となるどんぐりの確保も必要ですが、何よりどんぐりココロ豚を生産する農家が増えることが、当面の課題です。
「産学官連携のなかで生まれた価値の高い商品で、需要もあります。より産学官の連携を強めながら養豚農家の方が参入しやすい方策を検討していきたい」と話しています。

毎年、子どもたちに協力してもらい、どんぐりを収集。



地域の課題解決をお手伝いします

県立広島大学は、地域の活性化に積極的に貢献していくため、地域連携センターを各キャンパスに設置し、地域からの相談を受けながら、地域の抱える課題の解決や生涯教育などを支援しています。
庄原地域連携センターでは、直接、あるいは市町などを通して住民の方から相談をお受けすることも可能ですし、しょうばら産学官連携機構を通じて事業者の方々と相談をお受けしています。自治振興区から相談を受けることが多いのも庄原地域連携センターの特徴です。
ご相談いただく内容によって教員を紹介していますが、庄原キャンパス所属の教員だ

けでなく、他のキャンパスへ照会し、対応できる教員を紹介しています。
また、大学には「地域課題解決型研究」という予算が設けられていますので、自治振興区などの公的な組織から出された課題案件に対し、対応可能な教員がエントリーすれば、地域課題の解決のために本学の予算を活用して、研究することが可能です。
国も大学に地域との連携を期待していますので、こうしたシステムも運用しながら地域とのつながりを強めていきたいと考えています。
まずは庄原地域連携センターを身近な相談窓口としてぜひご利用ください。

県立広島大学
庄原地域連携センター
センター長
西村 和之 さん





上/暮らし宿お古での作業に参加した、左から山田耀平さん、持田哲平さん、石川実可子さん、大宮唯さん。右・下/切り出した竹を運び、土中に埋め込む作業。時折笑顔を見せながら黙々と作業。左下/昼食をとりながら深い話を聞けるのも魅力



農林業ボランティアサークル ファーマーズハンズ

INTERVIEW

助かるのはもちろん
一緒に作業を楽しんでいます



作業を依頼した
菱 亮一さん・千尋さん
絢音ちゃん・優真くん

ファーマーズハンズの皆さんには、田んぼの草抜きから、稲刈り、田植え、しいたけの収穫など一年を通して作業を手伝ってもらっています。手の掛かる作業が多いときには、とても助かっています。皆さんには農業に関する技術や知識など、身になるものを何か少しでも持ち帰ってほしいと思い、依頼内容を工夫しお願いしています。私たちも学生と一緒に学びながら作業を楽しんでいます。



県大では多くの学生が学んでいます。学生にとっては学内はもちろん、市内全体が学びのフィールド。地域に飛び出した学生が地域のチカラになっています。

フィールドへ飛び出せ

— 県大生のチカラ 1 —

県大1の人気サークル

農林業ボランティアサークル「ファーマーズハンズ」は、主に庄原・三次市などの県北を中心に、農家などから依頼を受けて、農林業に関するさまざまな作業を手伝っています。「楽しく作業を行いながら、座学では学べないようなことを学ぶ」ことをコンセプトに活動しています。

若いチカラが農家のチカラに

活動は、週に1度ミーティングを行い、農家から依頼された内容をメンバーで共有し、参加できるメンバーを募ります。年間を通して依頼がありますが、春と秋の農繁期に依頼が集中します。依頼日が重なったときには小グループ

に分かれて対応しています。

4件の依頼を受けた6月13日は4グループで活動。そのうちのひとつ、暮らし宿お古(川北町)での作業には4人が参加しました。この日の依頼内容は、炭素循環農法で野菜作りに取り組むための畑づくりとして、土の中に切り出した竹を埋めるといった作業のお手伝い。

4人は畑を片付け、事前に切り出してあった竹を運んだ後、10センチ幅の溝を約80センチの深さに掘り、竹を据え付け埋め戻す作業を行いました。

初めて作業を行った山田耀平さん(1年)は「予想以上にしんどい作業だった」と汗をぬぐいながらも「なかなか経験できない作業で勉強になる」と話し、同じく初参加の持田哲平さん(1年)は「作業はきついですが、その後のご飯が最高です」と爽やかな笑顔を見せていました。

作業を依頼した菱亮一さんは「彼らなしではできないことが多く、本当に助かっている」と感謝しきれない様子。この日作業を手伝いに訪れて

いた渡邊拓昭さん(高野町)も「人手が足りないときに本当に助かるし、このサークルの存在は農家にとってとても大きい」とうなずきます。

つながりが愛着を生む

学生の多くが市外出身者。農家や地域の人と一緒に作業することで、知らない土地に愛着を持つようになる学生も少なくないといえます。石川実可子さん(2年)は「庄原

は何も無いと思っていただけ、このサークルに入ったことで庄原にはいいところがたくさんあることに気づいた」と話し、大宮唯さん(4年)も「最初は農業を知らず興味はありませんでしたが、今では農家に嫁いでもいいかななんて思うようになりました」とほほ笑みます。

農家の負担を軽減するだけでなく、地域の活力を生むチカラを秘めているファーマーズハンズ。これからの活躍に注目です。



庄原を舞台にした「庄原ぐるっとスゴロク」。遊びながら庄原市のことを楽しく知ることができる。しょうばら九日市などに展示し、イベントを盛り上げている。



イベントに向け薪の調達に汗を流すメンバー。



地域活性化サークル さくらプランニング

地域に飛び出した学生と地域とがつながる。学生も地域もチカラが湧いてくる。

フィールドへ飛び出せ —県大生のチカラ2—

こともあり、楽しんでいきます」と声を弾ませます。今年6月14日に開催された「ひろしま山の日県民の集い」の庄原サテライト会場のプログラムのひとつとして実施。この集いは県内13市町15会場で開催され、里山をフィールドにしたプログラムが組まれています。庄原会場の里山トリアスロンはほかにはない珍しさから注目を集めています。

地域の大きなチカラに

メンバーは森林組合、地元の方たちの協力を得ながら、



●里山トリアスロン

薪割り、里山ラン、火おこしの3種目を順番で実施し、種目別と総合でタイムを競う競技。薪割りは、用意された直径約20センチの丸太を斧で4分割し、割った薪が規定の大きさの穴を通ればクリア。里山ランは高低差のある山道約800メートルを、途中にある崖をロープを使って登るなどして駆け抜ける。最後の火おこしはロケットストーブを使って湯を沸かす。里山ランまで大差がついても、最後の火おこしで逆転可能なのもこの競技の面白さ。県外から毎回参加する根強いファンがいる。この秋も開催予定で、詳しくは公式Webサイト「里山トリアスロン」で検索！

まちなかににぎわいを

さくらプランニングは、毎週1回の会議を通してさまざまなイベントを企画・実施し、庄原市の観光・地域振興に一役買うと活動しているサークルです。県立広島大学の学生と市内外に住む社会人で構成され、約20人で活動しています。

これまで、庄原市の名所を紹介する「ショートムービー」や、市内の観光地と特産品などを紹介する「庄原ぐるっとスゴロク」の制作、浴衣で楽しむ紅梅通り七夕まつりの開催など、まちなかににぎわい創出に力を入れてきました。そのほとんどが学生のアイデアから生まれています。

里山をもっと身近に

現在の活動の中で特に力を入れているのが「里山トリアスロン」。里山の暮らしに欠かせない3つの仕事を参考にした「薪割り・里山ラン・火おこし」の3種目を連続し

この日に向けて競技に必要な薪の準備や環境整備を行い、前日には案内看板やのぼりの設置などに汗を流しました。「さくらプランニングは重要な戦力で大きなチカラになっている」。こう語るのは、ひろしま山の日実行委員の高正さん。「大会が開催できるのも彼女たちのおかげ」と言い切ります。こうしたイベントを企画しても、地域では農家や会社勤めの人が多いため、大会運営が難しい状況にあるのだといいます。「準備段階から携わってくれるのでありがたいですし、里山トリアスロンも集客に貢献してくれている」と感謝の言葉を続けます。

庄原ファンを生み続ける

さくらプランニングメンバーで社会人の後藤伸彦さんは、学生が自分たちでつくるイベントを通じて成長し、地域の人とつながってほしいと願っている1人。その中から、「庄原に住みたいと思う学生が出てきてくれたら」と期待しています。「実際に定住してくれた学生もいますし、イベントがあるたびに庄原に帰ってきて協力してくれる卒業生もいます」。庄原ファンをつくり続ける存在として、さくらプランニングの活動は続いていきます。



浴衣で楽しむ紅梅通り七夕まつり（平成17年）当時のようす。現在は七夕まつり土曜夜市に出店で参加している。



庄原キャンパスへ 行ってみよう!

自然に囲まれた庄原キャンパス。学生でなくても利用できる場所があるのも魅力です。市民の皆さんが気軽に足を運べるスポットを、現役生の宮口夏菜さん(3年)に案内してもらいました。



宮口夏菜さん

おすすめ
スポット

1 ●図書館



蔵書数約18万5千冊。専門書、学術書はもちろん、新書本や文庫本、雑誌や新聞なども充実。情報管理室ではDVDの鑑賞もできる。



- 開館時間 8:45~21:30 ※土・日・祝日・月末日は休館
- 貸し出し 中学生以上1回5冊まで ※図書・雑誌は2週間、DVDは1週間

専門雑誌が豊富で、よく利用しています。料理本が充実しているので、いつも参考にしています。DVD鑑賞ができるのは県大では庄原キャンパスだけなんです。



人気の大学カレーは、目玉焼きとからあげ付きでボリューム満点です。

おすすめ
スポット

2 ●食堂



食材にこだわった44メニューが学生の胃袋を満たす。2階の国際交流スペースにはレンジがあり手作り弁当を持ち寄る学生も多い。



県立広島大学庄原キャンパス オープンキャンパス

- 日** 8月9日(日) 9:30~16:00
- 場** 庄原市七塚町562
- 内** 学部・学科・大学院紹介、模擬講義、施設見学、研究実験見学、個別相談、保護者説明会など。
- 問** 県立広島大学庄原キャンパス教学課
Tel 0824-74-1700
<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/>

おすすめ
スポット

3 ●中広場

緑と開放感あふれる空間が広がる。すぐそばに池があるので、夏場でも涼感が漂う。



庄原スタイル —庄原を選んだ理由—

庄原市で就職・定住した県大OB

細井 澄秋 さん

(島根県隠岐出身・東本町)

sumiaki hosoi

自分がやりたいことができる場所 好きな庄原に住み続けます

「今の仕事に出会えたのは県大に来たからこそ。」
そう語るのは、株式会社福本農産(山内町)で日々農業と向き合っている細井澄秋さん。地元の高校に通っていたとき、牧場実習で酪農の作業を経験したことがきっかけで動物への興味が沸き、生物のことが学べる広島県立大学(現在の県立広島大学)を選びました。

大学では生物資源管理学科を専攻し、農業経済・経営学を学びながら4年間、庄原市で大学生活を送りました。卒業後は福山市の畜産会社に就職しましたが、同大学院に通っている友人から「後継者を探している農家がいる。庄原で農業をしないか」と声が掛かりました。

「学生の頃から庄原が好きで住み慣れたところですし、通常、新規就農者ではできない経営規模。自分の牧場を持つという夢がかなうかもしれない。チャンスだと。」

細井さんは庄原への移住を決めました。「将来は農業がやりたいと話していたのを友人が覚えていてくれた」と感謝します。



新たな職場は福本博昭さんの農場。県大のすぐ西側に位置します。「県大の存在を身近に感じていたから声を掛けていただけなのだ」と思っています。

細井さんの後継が足がかりとなり、福本農場は農業法人へと移行。現在は30ヘクタールの水田と100頭を超える和牛飼育による経営を行っています。細井さんはさまざまな役割を任せられ、主には米作りを担当。作業計画をつくり4人の従業員と共に汗を流しています。

そんな細井さんの姿を間近で見ている社長の福本博昭さんは「頼りになる後継者が来てくれた」と喜んでいきます。



妻実礼さんと長男卓晴(こうせい)くん。実礼さんとは同じ県大のときに知り合った。休日は家族と過ごすことが専ら。

「地域の皆さんは好き勝手やっても受け入れてくださいますし、若い者にも頑張ってもらいたい」と声を掛けていただきます。それは県大を身近に感じ、頼りにしていただいているからだと思っています。そうした皆さんの気持ちに答えていきたいですね。」

県大卒業生としての誇りを胸に、地域で輝き続けます。

